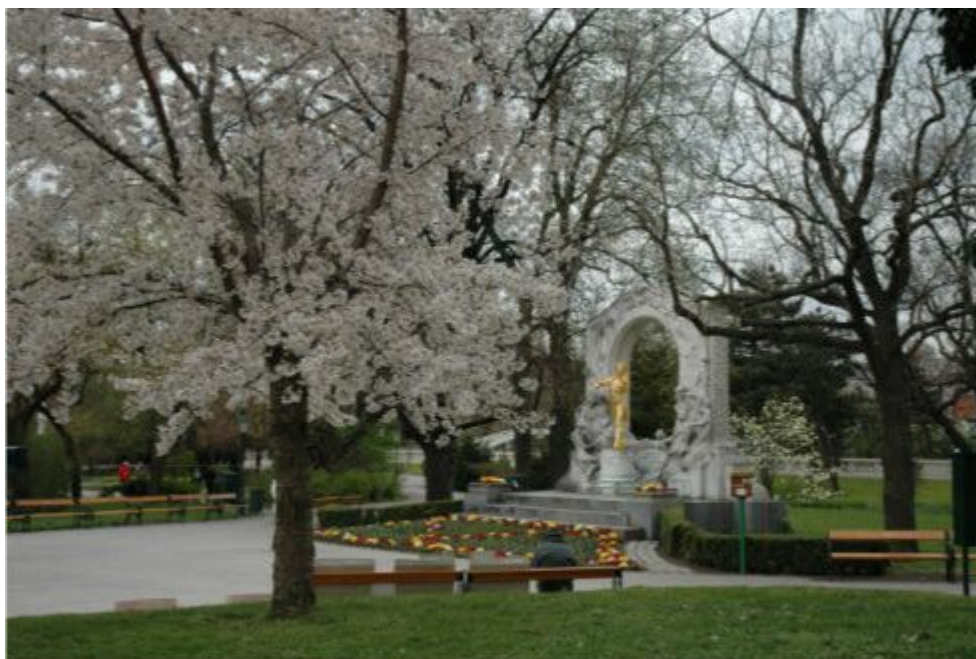


e-dream-s 通信

No. 76 発行：2007年4月15日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

目次

- | | | |
|--------------------|------|-------|
| 1. 京阪石山本線 | 辻荘一 | p. 2 |
| 2. 桜の京都で、行く末を祈る。 | 井川好二 | p. 4 |
| 3. 英語教育特区：その後<その1> | 中川房代 | p. 9 |
| 4. 春の来訪者とボランティア活動 | 山田昌子 | p.11 |
| 5. 旅のクスリ | 塚本美紀 | p. 14 |



オーストリア・ウィーン 市立公園（3）

©e-dream-s

（撮影 村井紳浩氏）

京阪石山本線

代表理事

辻 荘一

京阪石山寺本線、京阪膳所駅から2両編成の電車に乗って4つ目の三井寺駅の改札を出て目の前の疎水にそってやや上りこう配の道を5、6分歩く。左に折れて京都の町家風の家々が両側に立ち並ぶ細い路地を突き当たり、右を見ると石畳の道の100Mほど先に長良神社の鳥居が見える。長柄神社の後ろは小高い山になっている。その鳥居のほとんどくっつくようにして左側にあるのがU旅館である。



合宿に来る時はバスで来たので気づかなかったが、こうしてバレーボールの練習を終えて琵琶湖畔にある県立体育館から、京阪電車と徒歩で戻ってくると改めてこの辺りが静かな場所だと実感する。歩いて10分以内のところにコンビニもないのである。

例年バレーボール部の合宿は男女合同で夏に行われるのだが、今年は諸般の事情によりまだ桜もまばらな3月末に大津まで来ている。男子バレーボール部はここ数年1部リーグにあり、近畿大会にも出場しているものの部員数が減り、今年は1部リーグ残留と3年連続近畿大会出場のかかった正念場である。

ところで、私は決して大酒飲みではないが夕食時にビールがないのは許せない質である。缶ビール1本もあればいいのだが、これがないと食も進まない。少量でも毎日酒を飲み続けるのはよくないとは分かっているし、いわゆる休肝日を作らなければと、思ったり言われたりするのだがこれがなかなかできない。

さて、3泊4日の合宿に来ている間は午後6時30分から夕食である。もちろん生徒たちと一緒にいるから、ビールを飲むわけにはいかない。この合宿が計画された時から、技術指導もできないのに3泊4日の合宿をどう過ごすかや、旅館の飯が不味いかもかもしれないということはもちろん問題ではあったが、この夕食ビールもひそかに問題だったのである。

結論から言えば、この夕食ビール問題は杞憂に終わったのである。生徒の「いただきまーす」の挨拶の後で食べ始めてみれば、3回の夕食をおいしくいただくことがで

きたのである。もちろん旅館の夕食がおいしかったということもあるが、なぜかビールが欲しいという切実な欲求を感じなかったのである。とくに寝る前に酒が欲しい質でもないのに、夕食さえクリアしてしまえば、後は風呂に入って寝るだけである。いつもよりも相当早い時間に就寝することになるのだが、なんだか眠くないなど思いながら5分後には寝入ってしまう体質で、これは全く問題はない。考えてみれば、インフルエンザで熱がある時もビールは飲んでいたので、10年程前に盲腸の手術で入院して以来の休肝日となったのである。

こうして夕食時に必ずしもビールが必要ないと分かった私ではあるけれど、帰宅してからはやはり毎日ビールを飲む生活である。やはり夕食時にビールがないことは考えられない。

夕食時にビールに対する欲求がほとんどなかったのは、たったの3泊4日であるが合宿の間生活全体が変わったせいなのだろう。早起きして体育館まで行き、生徒の練習に付き合い、昼食は琵琶湖畔で遊覧船ミシガンを見ながら弁当を食べ、夕方旅館に戻る。夕食を食べ、風呂に入ったら11時には寝てしまう、そういう普段とは全く違う生活のなかで飲食に対する意識も変化していたのである。

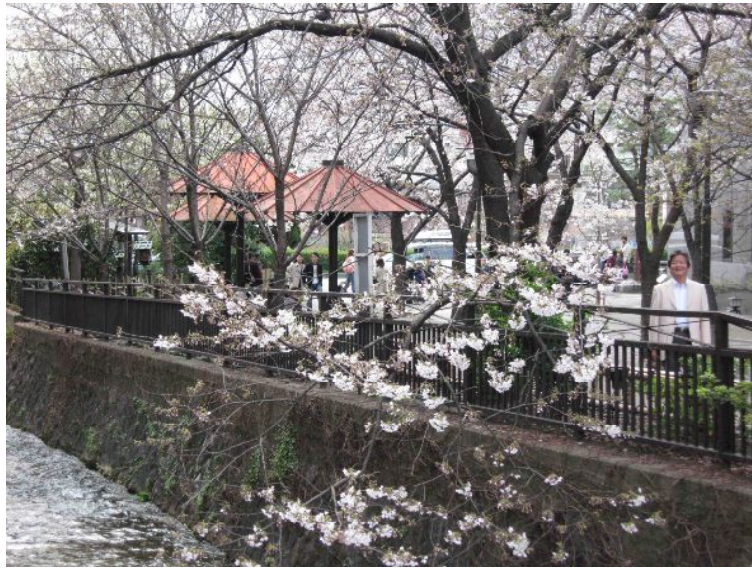
毎日朝から7時頃まで授業だ会議だ打ち合わせだと忙しく働き、12時を過ぎて寝る生活を繰り返している。何回か運動しようと思ったが続かず、酒を飲まない日を作ろうとしてもできなかった。それはもちろん自分の意思の弱さもあるけれど、一部分だけいつもと違うことをするのは難しいということなのだろう。その難しさを乗り越えて禁煙したり運動を続けたりすることができる人は、それだけ切実な理由や強い動機があり、また逆に生活のほんの一部でも変わるということは生活全体が変わったということでもあるのだろう。



石山本線は京阪膳所駅から3つ目の浜大津駅でなぜか市電と化して信号待ちをする。これをきっかけに、様々なファーストフード店に加えてスターバックスもパルコもある湖岸地帯とは対照的に昔ながらの町並に変化する。私もあと何年かで生活のペースが電車から市電に変わる時期を迎えている。変化する街並を眺めながら将来こんな町に住むのもいいかもしれないと思ったりした三月末でありました。

桜の京都で、行く末を祈る。

井川 好二



祇園の桜 (Photo by S. Ito)

京都の桜でなければ、桜ではないとは、谷崎潤一郎¹も云う通り。すなわち、小説「細雪」で：

花は蘆屋²の家の附近にもあるし、阪急電車³の窓からでもいくらでも眺められ

¹ たにざき - じゅんいちろう【谷崎潤一郎】小説家・劇作家。東京生れ。東大中退。第2次「新思潮」同人。「刺青しせい」「少年」など、耽美と背徳の空想的な世界を華麗に描いたが、大正後期から日本的な伝統美に傾倒し、王朝文学の息吹きを現代に生かした新しい境地を拓いた。作「蓼喰ふ虫」「春琴抄」「細雪」「少将滋幹の母」など。文化勲章。(1886～1965) [株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

² あしや【芦屋・蘆屋】兵庫県南東部の市。阪神間の住宅地。もと精道村の大字の名。万葉集の菟原処女(うないおとめ)、在原行平と松風・村雨の伝説などの舞台。人口7万9千。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

³ はんきゅう - でんしゃ【阪急電車】大阪・京都・兵庫の二府一県で営業する大手私鉄の一。梅田(大阪)・三宮(神戸)間の神戸本線、十三じゅうそう・河原町(京

るので、京都に限ったことはないのだけれども、鯛でも明石⁴鯛でなければ旨がない幸子は、花も京都の花でなければ見たような気がしないのであった⁵

「花」と云えば、むろん「桜」のことである。しかし、なぜ日本人は、この花が大好きなのだろう？期間限定の華やかさか、潔い散り際の美学か？

画家をしている Y の個展が、三条烏丸⁶で開かれているのを口実に、昔の友人たちが集まって、一緒に食事でもと、三月の終わりの土曜日、京都へ出かけた。桜観がてら、である。

こうした折にいつも顔を合わせるのは、大阪の有名校で古典を教える I と、父親譲りの会社を経営する S。後 2- 3 人声をかけるのだが、たいてい私を含めてこの 4 名が集まって飯を食い、酒を飲む。忙しいのはお互い様だが、古い友人と話してみれば、今の自分がはっきりする。そう云う機会は、2- 3 年に一度あるかないかだが、それが以前よりは貴重だと思える年齢になった。

ファッショナブルなビルの 5 階にある画廊。しかし、親戚付き合いでもそうだが、しばらく会っていないので、落ち合った当初は何やらぎこちない。「エライ白髪やな」とか、「禿げてはないよ」とか、「メタボリックでな」とか、軽いジャブの応酬で、少し場が和む。

Y の今回の個展のテーマは、「女神」。豊穡な女性をフィーチャーした、メルヘンタッチの水彩画がメインである。それはそれで春らしいとも思うし、これならまあ売れ筋だとも思うが、残念ながら私の好みではない。他の中年男三人の意見も同じと見える。それで Y の作品鑑賞はそそくさと片付けて、近くのイタリアン・レストランへ繰り出す。ビルの地下にある店で、座って落ち着くのは、昼間から

都) 間の京都本線などがある。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

⁴あかし【明石】兵庫県南部の市。明石海峡を隔てて淡路島に対し、交通の要地。もと松平氏 6 万石の城下町。中央標準時の子午線（東経 135 度）が本市を通過。明石の浦は白砂青松で知られた。人口 28 万 7 千。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

⁵「細雪（上）」『新装版谷崎潤一郎文庫 10』（1973 東京：六興出版）p.90。

⁶からすまる【烏丸】平安京の南北に通ずる小路の名。今「からすま」と称し、京都の中心街路。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

酒を飲むのに相応しい。こうなると、スパマンテ⁷から始めたい、のである。

「親父が死んだのが、55歳やったから、もう親父より長生きしてことになる」

「へえ、そうか、オヤッサン55やったんか、死にはったとき」

「ギャバン⁸、まだ若かったんや」

亡くなった父親の跡を継いで、中小企業の社長をしているSが、話し始めた。彼の父親の葬式に参列してから、もう30年になる。フランスの映画俳優、ジャン・ギャバンに似た、ベレー帽の似合う、今で云う「チョイワル・オヤジ」。仲間内では「ギャバン」で通っていた。

当時、心斎橋⁹にあったSの家に遊びに行くとよく顔をあわせ、夜は酒の入っていることが多かった。人好きなオヤジで、生意気ざかりの大学生だった我々にも、いろいろと話しかけてくれ、「酔眼朦朧¹⁰」と云う言葉は、そのときギャバンに習った。

ギャバンの死は、55歳と早すぎる死であったが、Yの父も、私の父も、この2-3年で次々と亡くなった。幼いときに父を亡くしたIを含めて、4人全員の父は世を去った。それに引き換え、母親たちは全員健在。まだこれから10年は生きるだろうとは、親不孝な息子たちの言い草、笑い草。

近頃、団塊の世代の定年が話題になる。60歳の定年まで後2-3年である。

⁷◆スパークリング・ワイン (sparkling wine) [外来語年鑑 2005年] 発泡ワイン。アルコール分12%の軽いワインで、カヴァ(西 cava)、スパマンテ(伊 spumante)、ゼクト(独 Sekt) などがある。[株式会社自由国民社 現代用語の基礎知識 2005年版]

⁸ギャバン【Jean Gabin】フランスの映画俳優。「望郷」「大いなる幻影」「現金(げんなま)に手を出すな」「ヘッドライト」などに出演。(1904~1976) [株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

⁹しんさいばし-すじ【心斎橋筋】大阪府中央区にある繁華街。御堂筋の一筋東側の通りで、心斎橋から道頓堀川の戎(えびす)橋に至る間。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

¹⁰すいがんもうろう【酔眼朦朧】酒に酔って、とろんとした目つきになり、物のはっきり見えないようす。◆「朦朧」は、かすんで物の形がはっきり見えないようす。[例] 酒に強い彼も、さすがに3次会では酔眼朦朧としていた。◎「酔眼朦朧妻にあなたどなた」[四字熟語辞典]

「団塊の世代って、いろいろ云われてるけど、どうするつもりや、定年後？」
「俺は、定年関係ないなあ、絵描いていだけ」
「俺も、別に関係ない。社長に定年はないからな」
「そうなると、俺とお前の話か」

古典の教師 S と私の話になる。偶然だが、どちらも教師をしている。だから、サラリーマンである。

「神戸に住もうと思て」
「ええ？」
「今の家売って、神戸に住みたいねん」
「なんでまた？」
「好きやねん」

S は、60歳の定年後はあっさり仕事を辞めて、神戸で悠々自適といきたいらしい。熱心なカトリック信者である彼は、神戸に移っても、教会活動は続けるつもりだろう。詳しくは語らないが、奥さんの希望でもあるらしい。

「コージは、どうしようと思てんねん？」
「大学は65歳定年やから、後しばらくは今のままか」
「それで」
「アジアに学校つくりたいと思てるねん」
「へえ」
「ほんで、その学校で教えたりしてもええな」
「なるほど、けど、アジアのどこ？」
「それは、これからや」
「金は？」
「それもこれから。夢見たいな話やけど、これをやってからやないと、落ち着いて、リタイヤできん」

団塊の世代と一口に云っても、人それぞれ。今までの来し方も様々だし、これからの行く末もいろいろ。まだまだ先は長いと思っけていても、時間は刻々。限られた時間、しっかり考えて、悔いのない人生を生きたいものである。

ワインを三本空けて表にでる。花曇りの空に、春の陽が漸く傾きかかっている。人波に誘われ、桜に誘われて、酔眼朦朧、祇園¹¹へ向かって歩き出す。

酔っぱらいのだらだら歩き、ふと紛れ込んだのは、安井神社¹²の境内。安井の金比羅さんとも云う。藤原鎌足の創建とあるが、その大層な由緒のわりには小体な神社。しかしどことなく品があるか思えるのは、やはり歴史か？

「あれは、米朝¹³やないか」

と、I が声を上げた方を振り返ると、最近まで入院していたと聞く上方落語の重鎮、桂米朝。境内の桜の木の下で、舞子のような姿の若い女性と、嬉々として写真撮っている。

¹¹京都の八坂神社。また、その付近一帯の地。◇近世以降、花街として発展した。
[明鏡国語辞典]

¹²第38代天智天皇(てんちてんのう)の御代(668-671)に藤原鎌足(ふじわらのかまたり)が一堂を創建し、紫色の藤を植え藤寺と号して、家門の隆昌と子孫の長久を祈ったことに始まります。第75代崇徳天皇(すとくてんのう)(1123-41)は特にこの藤を好まれ、久安2年(1146)に堂塔を修造して、寵妃烏丸殿(からすまどの)を住まわされました。崇徳上皇が保元の乱(1156)に敗れて讃岐(香川県)で崩じられた時に、烏丸殿は寺中の観音堂に上皇より賜った自筆の御尊影をお祀りされました。下って治承元年(1177)、大円法師(だいえんほうし)が御堂にご参拝されましたときに、崇徳上皇がお姿を現わされ往時の盛況をお示しになりました。このことを直ちに後白河法王(ごしらかわほうおう)にお伝えし、詔によって建治年間(1275-77)に建立された、光明院観勝寺が当社の起こりといわれています。光明院観勝寺は応仁の乱(1467-77)の兵火により荒廃してしまいましたが、元禄8年(1695)に太秦安井(京都市右京区)にあった蓮華光院が当地に移建されました時に、その鎮守として崇徳天皇に加えて、讃岐金刀比羅宮より勧請した大物主神と、源頼政を祀ったことから安井の金比羅さんの名で知られるようになりました。明治維新の後、院を廃して安井神社と改称しましたが、第二次大戦後安井金比羅宮となり現在に至っています。<http://www.yasui-konpiragu.or.jp/ryakki.html>

¹³3代目 桂米朝(1925年11月6日-)は、入門当時滅びかけていた上方落語の復興に尽力し、6代目笑福亭松鶴、5代目桂文枝、3代目桂春団治と共に、昭和以降の「上方落語の四天王」と呼ばれる。本名は中川清。以前から、先代の諸事情のため米團治の名前は継がないことを公言している。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A1%82%E7%B1%B3%E6%9C%9D>

病み上がりには、元気そうな人間国宝の姿である。落語は好きでも、米朝ファンではないが、この日は話の流れから、元気なジジイは、良しとしようと言う気分。だから、米朝、元気で、結構、結構。元気でなければ、やりたいこともできないのが道理。80代の米朝は、なにやら可愛いジジイぶりである。



祇園・安井神社にて、桂米朝

桜の京都で、酔眼朦朧として考えたことは、やりたいことをやれる時間は、どんどんなくなっていて、早く始めるにこしたことはない。しかし、それには、精神と肉体の健康が大切とあたり前のような結論。4人の酔っぱらいオヤジは、安井の金比羅さんに、深く頭を垂れて、それぞれの行く末を祈ったのであった。

そう云う成り行きなので、やはり、桜は京都でなければ、なのである。(Saturday, April 14, 2007)

英語教育特区：その後《その1》

中 川 房 代

新学期が始まって1週間が過ぎた。授業も何時間もあり、新しく出会った生徒の顔も少し覚えた。生徒にも教師にも緊張感の中にも新鮮な気持ちがあって、頑張ろうという意欲が心地よく感じられる。

「今年の中学校1年生は、ちょっと違う。」

と、放課後の職員室で1年生の英語の授業を担当している教師が言う。どう違うのかと聞くと、「英語ができる感じがする。」という答えが返ってきた。1〜2時間授業に行ったくらいで「できる」とわかるのか？とは思いますが、実際、授業に行ってみると、中1の生徒は英語で簡単な挨拶、自己紹介ができ、20までの数字、月の名前、曜日が言える。ALTの入った授業でも、英語だけの指示で簡単なゲーム的な活動ができる。何と言っても英語で話すことに戸惑いがあまりない。英語を言うことに「慣れている」という感じだ。

今年度入学した生徒は、2年前の小学校5年生から2年間、週1回の英語活動の授業を受けてきた。私の市では、小学校の英語活動の授業は「英語活動支援者」と呼ばれる日本人（アルバイト）と学級担任、英担（英語活動専科的な教師）で行われ、月に1回程度ALTが来る、という図式で行われている。

小学校に教科としての英語を導入することの是非は、まだまだ議論の多いところだが、実際に週1回×2年間英語に触れてきた生徒を目の当たりにすると、今までとは間違いなく違う段階に来ている現実を突きつけられる。その生徒達を受け入れた中学校側はどうすればいいのか、せっきくの経験と話すことへの意欲をどう伸ばしてやれるのかという課題にぶち当たる。小学校・中学校間の連携が必要なのだが、実はなかなか進んでいない。昨年度末に、やっと、初めて小学校との英語に関する引き継ぎの会議を行ったというのが現状だ。

今年度は「英語教育特区」の3年目。11月上旬には、その成果を発表する全国規模の研究会が予定されている。2日間で、市内の全小学校・中学校での公開授業と市民会館でのシンポジウムなどが行われると聞いている。4月末には実行委員会が結成され、準備が始まることになっている。

特区は規制緩和の一つとして行われている国の施策。その意味でも、早期英語教育のケーススタディ1つとして、今後私たちがどうしていくのがいいのかを考えるヒントになると思う。その意味でも、この続きは『特区：その後』として《その2》、《その3》……と定期的に報告をしていくつもりですので、よろしくお願いいたします。

春の来訪者とボランティア活動

理事 山田昌子

桜の季節もそろそろ終わりを告げ、若葉の美しい季節が始まろうとしています。この春は、私の勤務校のもと ALT たちが、はるばる京都に会いに来てくれることが多く、賑やかな春となりました。

3月1日の卒業式では、一昨年度の ALT が、イギリスから日本人妻と共に、卒業する生徒たちに会いに駆けつけてくれました。京都市北部の小・中学校で働いている、オーストラリア人のもと ALT は、わざわざ休暇をとってやって来ました。卒業式の後の私のクラスのホームルームでは、現在のカナダ人 ALT を含め、スーツ姿の男性3名からお祝いの言葉を英語で聞き、私は「なんて思い出深い卒業の日なのだろう！」と、生徒たちと共に喜びました。遥々福の風がやってきた！という感がありました。

この4月初旬には、3年前と一緒に働いていた ALT セーラも、休暇で来日しました。彼女を知る先生方に声をかけ、京都の小さな町家風イタリアン・レストランをほぼ貸し切り状態にし、ささやかなパーティをすることになりました。オーストラリア・タスマニアから旦那さん、お姉さんと一緒にやってきたセーラは、小学校の教員になり、結婚しても、ちっとも変わらず、11名の日本の友人たちを前に、来京がうれしくてたまらないという笑顔を見せてくれました。

「ところで、セーラ、日本の次は、イタリアやギリシャに行くんだって？6か月も休みがとれるなんてスゴイねえ。」と、一昨年他校に転勤し、久しぶりに会った A さん。

「実は、小学校の教員はやめたの。シュタイナーのやり方で進める小学校に勤務していて、それはとてもいい教育で、気に入っていたんだけど、8年間は絶対に休みをとってはいけないことになっているの。でも、夫も私も子どもが欲しい。産休がとれないから、思い切って退職することにしたの。夫は6か月後に復職できるので、ラッキーだわ。新婚生活を過ごしていた新しいおうちも、売っちゃったのよ。」

「へえ～、思い切ったよねえ。で、この6か月は、どのように過ごすの？」と私。

「イタリアやギリシャでは、サイクリングしているんな場所を周りた。でも、残りの3か月は、ケニアに行くの。」

「ケニア？」一同、大きな声をあげた。

「夫と二人で、ケニアの学校を訪問して、ボランティア活動をする予定なの。ずっと前からやりたかったから、すごくワクワクしているわ。」

カメルーンを訪問したことのある私は、赤い土の地に所狭しとアフリカの男女が集まり、踊ったり歌ったりしている光景を思い出しました。訪問した学校は教材や設備は決して十分とは言えませんでした。一生懸命学びたいという輝く瞳が印象的な生徒たちの顔が浮かんで来ました。子どもができる前に、アフリカの地でボランティア活動をしようなんて、セーラらしい、私は思わず頷いていました。

そう言えば、最近、休暇をとって旅をしボランティア活動をする人々が増えているそうです。先日、インターネット・ニュースのひとつ CNN.co.jp で、こんな記事が掲載されていました。

シカゴ (AP) 観光名所を訪ねたりビーチでくつろいだりする代わりに、貧しい途上国でボランティアに参加する旅はいかが——。米国の中高年層を中心に、人道奉仕をテーマにしたツアーの人気の高まっている。日常生活では経験できない「達成感」や「異文化体験」を求めて参加する人が多いようだ。

メイン州に住む教師、マイク・ウッドさん(55)は今年2月、中米ホンジュラスで休暇を過ごした。滞在中は有名な古代遺跡なども訪ねたが、ほとんどの時間を、ブタ小屋とトイレの建設現場で過ごした。ウッドさんが参加したのは、熱帯雨林破壊の問題に取り組むボランティア団体のツアーだ。一行は電気も水道もない村に1週間寝泊まりし、早朝から土木工事に精を出した。ツアー参加費は、航

空券を除いて12日間で1000ドル（約11万9000円）。「作業は大変だったけれど、村では携帯電話も通じない。株式市場のことも、家庭の雑事も忘れ、日常のストレスから完全に逃れることができた」と、ウッドさんは満足げに振り返る。

ボランティアとツーリズム（観光旅行）を合わせて「ボランツーリズム」と呼ばれるこうした旅は、50代前後を迎えて時間的、金銭的余裕ができたベビーブーム世代の間で人気を呼んでいる。また、米国では近年、同時多発テロや大型ハリケーン「カトリーナ」などの影響を受け、若者から退職後の高齢者まで幅広い年齢層で、ボランティア活動への関心が高まってきた。ボランツーリズムの主催者は、従来の非営利団体（NPO）に一般旅行会社も加わり、過去3年間で倍増したとの推計もある。

ニュージャージー州の会計士、ジョン・ビトコフスキーさん（54）は毎年、妻と4人の子どもたちを連れ、教会が主催する中米グアテマラへの旅に参加する。孤児院に滞在して「子どもたちに愛情を注ぐ」のが、参加者の任務だ。かつては国立公園やカリブ海で休暇を過ごしたというビトコフスキーさん一家だが、グアテマラ旅行の方が「得るものははるかに大きい」という。

ノースカロライナ州の皮膚科医、ペギー・フラーさん（47）は2年前、数週間の長期休暇を利用してスマトラ沖地震・津波の被災地を訪れ、泥や水、コンクリートブロックなどを運ぶ作業を手伝った。「短い間だったのであまり役に立てなかったと思うけど、人々の喜んでくれた顔が忘れられないわ」と、笑顔で思い出を語った。

一言で「ボランツーリズム」と言っても、いろいろな形があるようです。が、単に観光地を訪れるだけの旅行には何ら関心のない私は、「行く価値のある旅だったなあ」と達成感が得られる目的があれば、旅は意味のある思い出深いものになるだろうと思っています。実際、e-dream-s や ACROSS に関連する旅は、どれもこれも充実した内容で、いつも達成感を感じるものでした。それがあったからこそ、現在の自分があるといっても過言ではないと思います。

ボランティア活動をする人々の方が、現地の人々以上に、活動をすることで得ら

れるものが多いのかもしれませんが。だからでしょうか、世界ではそういったボランティア活動を求める人々が増えているのです。e-dream-s では、どのようなボランティア活動ができるのか、そしてどのようなボランティア活動を提供することができるのか、もっと考えていきたいと思います。その人がやって来ることで人が喜んでくれる、そういう関係づくりのお手伝い如果能したら、どんなに楽しいでしょう。

旅のクスリ

塚本美紀

桜の便りが届き始めたある日、疼き始めた旅心がどうにも治まらず、以前から行ってみたいと思っていた南紀地方を旅することにした。苔むす熊野古道をとおって熊野三山を巡ったり、白浜で紺碧の海と古湯をのんびり楽しんだり、醤油発祥の地である湯浅の旧い町並みを歩いたりした。暖かい気候のせいなのか、あるいは落ち着いた町並みのせいなのか、旅で出会った人は皆、穏やかで気持ちの良い人たちばかりだった。

旅のある日、一日中歩き疲れた体を休めようと、白浜の海ぎわにある温泉に立ち寄った。大きな岩で囲まれた浴槽は、波しぶきがかかるほど海に近く、潮風の中、海の青と空の青に囲まれて、身も心もリラックスした。大阪から来たという女性とどこの旅館のお風呂が良かったの、どこのレストランがおいしかったのと話していると、一人の白人女性がニコニコと微笑みながらお風呂に入ってきた。しばらく三人で笑顔をかわしていると、大阪の女性が「Where...from?」と白人の女性に向かって言った。「Austria.」と白人女性。「ああ、オーストラリアね。」と大阪の女性が言うと、「No, Austria. Vienna...Um...ウィーン」と白人女性が言った。これを皮切りに、初対面である三人の女のおしゃべりが始まった。オーストリア人女性は、仕事で大阪に来ているご主人と一緒に来日し、ご主人が仕事をしている間、自分は一人で旅をしているのだとのこと。日本人はどこにいても皆、親切で、お陰で初めて訪れた国であるにもかかわらず、何の苦労もなく旅を楽しんでいると言っていた。それらのことを要約して大阪の女性に伝えると、すぐにオーストリア人女性に向かって満面の笑顔で「Thank you.」と言い、次に私に向かって「でも、お互い様よねえ。私たち日本人だって、外国に行ったらその人たちにいっぱい親切にしているんですもの。ねえ、そう英語で伝えて。」

と言った。他にも、白浜の歴史だの、この温泉の効用だの、関西地域の観光名所など、いろんな話をした。

それにしてもこの大阪人女性、ただものではない。片言の英語とはいえ、まったく慌てることも動じることもなく、笑顔とジェスチャーを交え、しっかり社交をしている。オーストリア人女性の記憶の中に、もう一人の親切な日本人としてしっかりインプットされているに違いない。いったい何をしている人なのだろうかと気になっていたら、彼女はお茶の先生で、海外からホームステイで日本を訪れる子供たちが茶道の体験をするときに、講師としてよばれるとのことであった。彼女には伝えたいことがたくさんあって、その「仕事」をこなすために必要なものとして英語が機能しているのだろう。自分の教室のことを考えると、私は生徒にそんな場面をどれだけ与えることができているのだろうか和大いに反省した。同時に、私自身は自分の「仕事」を成し遂げるに十分な英語力を備えているのかということを見ると、温泉での国際交流にただ満足しているわけにはいかなかった。

旅にでると、いろんな人やものとの出会いがあり、また新しい自分との出会いのきっかけもある。来週から今年度の授業が始まる。「旅のクスリ」はよく効くなあと思えるよう、しっかり新年度をスタートさせたい。

編集後記

15年ぶりに中学1年生を担当しました。以前のペースで動いていると、体力的にいろいろなことができなくなっていることに驚く反面、精神面では少し許容範囲が広がった自分を発見しました。視野を広げる1年にしたいです。
(道面和枝)